

## MOSAIQ® – Japan's first OIS

日本語対応の放射線治療マネジメントシステム(放射線情報システム: OIS) MOSAIQが、2つの大規模な医療施設における放射線治療フローの統合を実現しました。

2010年7月に日本で初めて日本語版MOSAIQ(放射線治療専用の統合マネジメントシステム)が先端医療センター(以下、IBRI)に納入されました。その1年後には神戸市立医療センター中央市民病院(以下、神戸市立医療センター)に納入され、両センターは、国内初のマルチサイトオペレーションを構築しながら、両センターの放射線治療フローの統合を目指して日本語版MOSAIQの実用化に共同で取り組み始めました。

IBRIがMOSAIQを導入する大きな決め手となったのは、治療RISと照合記録システムがひとつになったシステムであり統合的に利用できることと、日本語であることの2点でした。IBRIによるMOSAIQ導入以前には、日本国内に治療RISと照合記録システムが一体化したシステムは存在せず、別々のシステムで運用をしていました。そして、導入にあたってはシステムが日本語であることは必須条件でした。

「医師にとってシステムが日本語でないことはそれほど大きな問題ではありませんが、技師や看護師、受付スタッフなど他のスタッフにとっては、とにかく日本語であることが必要でした。」と、IBRIの放射線治療科部長である小久保雅樹医師は語ります。「もしも日本語バージョンが提供されなかったら、たとえ米国で大きなシェアを持つMOSAIQとはいえ、我々は導入しなかったでしょう。」

### Two centers, one workflow

2011年夏以降、4台の治療機(神戸市立医療センターのVarian製リニアック2台とIBRIのVarianおよびMHI Vero)、加えて神戸市立医療センターのNEC製HISとIBRIの富士通製HISを使用する両センター間において、専用のネットワークを介した共通のワークフローがMOSAIQによって整備されてきました。全ての患者情報は、神戸市立医療センターにあるMOSAIQサーバーに集約されます。

「共通ワークフローを構築したことで、治療方法や適応に応じて患者様を割り振って両センターの治療機をより効率的に使用できています。同様の治療を同じ治療機に割り当てるため、治療時間が短縮されるのです。さらに、MOSAIQが別の治療機も管理しているため、以前の情報システム利用時とは違って、スタッフは治療機ごとに違うオペレーションを行う必要もありません。」

また、患者データベースが集約されたことで、両センターのスタッフが治療の詳細を確認するために施設間の行き来に時間を費やすこともなくなりました。

「両センターの誰もが今満足しています。IBRIと神戸市立医療センターの統合ワークフローは人材と治療システムの両方の活用において効率を高めました。また、MOSAIQはHL7やDICOMという標準プロトコルを採用しているため、新しい技術の採用やアップグレード実施も容易です。」